

(4) ②様式第4号-2 (報告書)

※文字のフォント、大きさは Meiryu UI /12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。

※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けてください。

※必ず A3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

NITS・教職大学院 等	<b>主催</b> ：国立大学法人弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻 [教職大学院] <b>後援</b> ：青森県教育委員会、弘前市教育委員会、青森市教育委員会、 八戸市教育委員会、『弘前大学「子どもの貧困」をめぐる協働プロジェクト』
コラボ研修プログラ ム	<b>事業名</b> ：NITS・教職大学院コラボ研修プログラム支援事業 Well-being 社会の形成に向けた研修会
支援事業報告書	<b>研修等名</b> ：【NITS・教職大学院コラボ研修】 「ヤングケアラー」のために、今、大人ができること～繋がろう Well-being 社会を目指して～
	<b>開催日時</b> ：令和5年2月18日 12時50分～16時30分 <b>開催場所</b> ：弘前大学（青森県弘前市文京町1番地） <b>参加人数</b> ：40人（教育関係者19名、福祉関係者13名、行政関係者8名） <b>企画運営</b> ：教職大学院院生、教員17名

**内容**：本研修プログラムは次のとおりである。

第1部 講演 弘前大学教職大学院 吉田美穂教授「ヤングケアラーと子どもの貧困～青森県定時制高校の調査から～」

第2部 パネルディスカッション「ヤングケアラーのためにどう繋がってきたか？どう繋がれるか？」

第3部 グループ交流・事例検討・全体共有

【企画の背景と構成】

近年、学校を取り巻く現状は複雑化している。また少子高齢化の加速に伴い「ヤングケアラーの増加」が予想される。これらの課題について、学校はもちろん単独の機関で対応することは難しい。そこで、教育機関や福祉をはじめとする専門機関との連携・協働による地域のリソースを生かしたネットワークの構築が急務だと考える。Well-being 社会の形成のために、大人としてできることを考え、今後の一步を踏み出す機会とすることを目的として本研修会を企画した。第1部では、吉田教授の講演から「子どもの貧困」について学び、「ヤングケアラー」や「県内の実態」について参加者の知識を更新した。第2部では、それぞれの専門機関の強みを知り、子ども達のために、どこどう繋がればいいのかイメージをもつ機会とした。第3部では、グループごとに事例を基にして、誰とどう繋がることができるか話し合い、明日につながる一步を踏み出し参加者一人一人が当事者意識を醸成できるような構成となるよう努めた。

**成果**：【事後アンケートより】

【**対面**】・「ヤングケアラー」と「子どもの貧困」の基礎を知ることができた。・勉強不足を痛感した。自分の立場でできることを考える機会になった。教育機関では、管理職が主体的に取り組むべきだと考える。・有意義な機会になった。いろいろな立場の人と対話し、これまでの実践を振り返るとともに、大切なことに気付くことができた。今日の学びを生かし、今後取り組みたい。グループでの話し合いも充実した時間になった。

【**オンライン**】・「子どもの貧困」や「ヤングケアラー」といった問題について現状を知ることができた。もっと多くの人が必要があると思う。・子供の背景が様々であること、支援もケースバイケースでいろいろあることがわかった。関わる子ど

